特集

100年目のエコロジー

今からちょうど100年前。南方熊楠が「エコロギー」なる言葉を、日本ではじめて用いた。

明治時代の後半、神社合祀令により地域の生態系を育んできた鎮守の森は伐採され、神々との関係を大切にしてきた日本人のコミュニティが失われようとしていた。田辺に居を構えていた熊楠はその政府の命に猛然と抗議し、反対運動に心血を注いだ。

エコロジーとは、自然や環境を単に保護する運動を指す言葉ではなく、「生態学」という広義な概念である。生物や環境、ひいては人々の暮らしなど自然界の全ては、互いに無関係ではなく影響しあい、体系的に存在するという考えだ。

未曾有の大震災に見舞われ、人と人とのつながりやエネルギー問題に、皆が真剣に向き合おうとしている今日。熊楠が説いたエコロジーの心を改めてひもといてみよう。

熊楠により守られた田中神社の鎮守の森（上富田町岡）